

こうなる 2025 の医療情報

国際医療福祉大学医療福祉学部長 高橋泰

(これまでのプレゼン画像が、You-tube で視聴できます)

- ・2016年10月20日第1回会議のプレゼン→「こうなる 2025 の医療」で検索→You-tube
- ・2016年10月26日第2回会議のプレゼン→「こうなる 2025 の介護」で検索→You-tube
- ・今回のプレゼン映像も、「こうなる 2025 の医療情報」で You-tube に近日中にアップ予定

「こうなる 2025 の医療情報」のポイント

ポイント 1. 有機的なデータの連結

(平成 29 年 1 月 12 日 厚生労働省第 1 回 データヘルス改革推進本部 資料より抜粋)

これまでの我が国の健康・医療・介護施策における ICT の 利活用は、さまざまな縦割り構造を背景に、その前提となるデータが分散し、相互につながらない形で取組が進められてきた結果、一体的に機能せず、必ずしも現場や産官学の力を引き出したり、患者・国民がメリットを実感できる形とはなっていなかった。

(データが有機的につながった時のイメージ①)

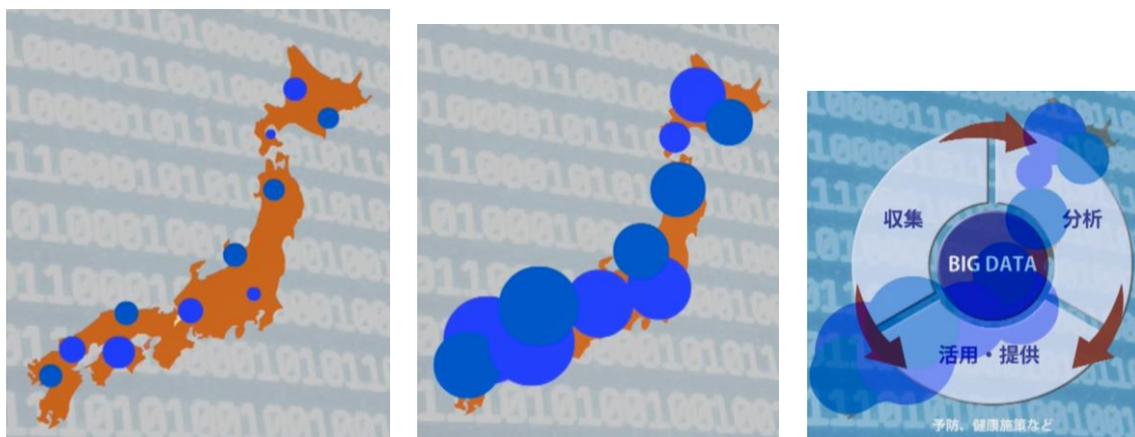
以前は、カルテ情報は医療機関、健診の情報は健診機関、日々の健康情報は個人と、さまざまな場所に散在しており、それぞれが連携することはありませんでした。これらの情報を、一元管理して、医療、健康サービスに活用されています。

過去の健康診断の記録も参照できるため、継続的な健康管理に役立ちます。

クラウド上の健康情報から、腎結石の既往歴があることより、尿路結石が疑われます。薬物アレルギーがあることもわかりました

1

(データが有機的につながった時のイメージ②)



全国から集まった膨大な健康情報は、いわゆる「ビッグ・データ」としての活用が考えられます。

地域ごとの疾病傾向や、薬剤の効果と副作用など、さまざまな情報が得られ、予防、健康施策への活用が可能です。

ポイント 2. 人手不足に有用な業務の「効率化」につながるデータ活用



さまざまな技術革新が、医療・介護の効率化に役立っています。

例えば糖尿病の場合、日々、血糖値をモニタする必要があります。以前は採血して検査する必要がありましたが、ブレスレット型のウェアラブルデバイスで、針を使わない血糖値測定が可能になりました。測定した血糖値は、そのままクラウドに蓄えられ、医師やケアスタッフが参照することができます。



夜間勤務の負担軽減には、見守りシステムが活躍します。センサーが動作を感知し、AI が行動に危険があると判断すると、夜間スタッフの端末に信号を発信。訪問して対処可能です。

このシステムにより、以前 3 人体制であった夜勤が、2 人体制でも余裕を持って対応が可能になりました。

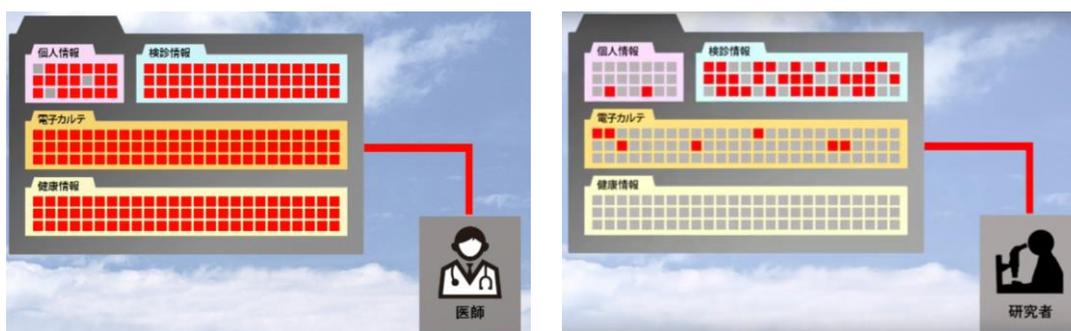
ポイント3. 使える(≡多すぎない)、わかりやすいデータの作成

クラウド環境を通して、大量のデータが集められ、使用可能な時代がすぐそこまで来ている。しかし大量データを集めただけでは、何の役にも立たない。集められたデータが有効に活用されるには、(1) 大量のデータの中から、**各人が必要な情報だけ**を取り出して提示する技術と、(2) **難解な用語を簡単に説明**してくれる仕組みが必要である。



(難解な用語を簡単に説明してくれる「健康ライブラリー」のイメージ)

ポイント4. セキュリティの確保とともに、情報提供ルール of 確率



クラウド上の健康情報には、**セキュリティの確保**とともに、**情報提供ルールの確率**が不可欠です。例えば担当医師であれば、ほとんどの情報にアクセス可能です。介護スタッフならば、提供範囲が限られて提供され、研究者には、個人情報を含まない形で幅広い情報が提供されます。これら全ては、本人の情報提供意思によってコントロールされています。